

●5. 国際標準化活動評価モデルに基づく標準化の支援と人材育成の検討 (済み)

小町 祐史(大阪工大)

【質問者】

通常の人件費はどのように考えればよいのか。

【発表者】

標準化部署があればその人件費を入れることが考えられるが、これまでは開発部署等の標準化部署でないエキスパートが活動を行っていることが多かったので、3.1のプレゼン資料に示した具体例の数値では分の人件費を考慮していない。

【質問者】

標準化活動の費用に対して何本の標準を作成できたかという指標は標準化機関の評価であって、企業の標準化活動の評価にはどう考えればいいのか。

【発表者】

企業がどの標準化機関を使えば効率的かという指標になる。

【質問者】

標準化の成果はある時間を経たのちに得られるが時間は考慮しないとしている。

しかし、現在では標準化活動に参加しながら得られる価値もあるのではなからうか。たとえば、規格発行と同時に製品を発売することで得られた先行者利益を評価したり、世間から注目を浴びている標準化活動への参加PRによる宣伝効果を評価したりできる。

【質問者】

貢献度という考え方は必要だが、実際には難しい。

たとえば、売り上げとコストは金額的に出すことができるが、売り上げに標準化活動がどの程度貢献したかということはどうやって設定すればいいのだろうか。

これがなかなか難しく、いまのところ良い方法がない。

【発表者】

貢献度はこのモデルでは δ に含まれるが、確かにその値を求めることはかなり難しい。

【質問者】

知財なら、特許に対する貢献度がある。この考え方が参考にならないだろうか。

【質問者】

最近の裁判事例では、売り上げに対する個人の貢献度は5%程度になっている。

ある企業では1%としているところもあるようだが。

【質問者】

しかし、特許を出したばかりのときには売り上げもなく、評価のしようがないのではないだろうか。そういう意味では、標準化活動の評価も似たところがある。

【質問者】

特許を出したばかりの効用としては、他の特許を排除したり対抗したりという効果がある。

【質問者】

貢献度という考え方は必要だが、どんな標準でも同一だと考えるのは適切だろうか。商品特性や市場分類や国・地域などで変わってくると考えたほうが自然ではなからうか。

【発表者】

特定の規格の効果・貢献を検討することは重要であるが、このフローモデルでは扱っていない。

【質問者】

実際には各企業で標準化の目的や目標は異なる。目的や目標が異なれば、その成功度を表わす指標も異なってくる。標準化活動関数もそうした工夫が必要な気がする。日本でも、以前、一橋大学の栗原先生が「標準学」を提唱され、この研究会の発足時にもご講演いただいているが、その後の動きが無かった。

【発表者】

特定企業の特定目標への配慮もこのモデルでは扱っていないが、今後の検討課題としたい。